



自然と文化を結ぶ遺産教育：ICCROM-IUCNイニシアチブ

著者	Wijesuriya Gamini
雑誌名	世界遺産学研究
巻	1
ページ	3-6
発行年	2016-03-31
URL	http://doi.org/10.15068/00137485

自然と文化を結ぶ遺産教育：ICCROM-IUCNイニシアチブ

Dr. Gamini Wijesuriya¹⁾

所属1) ICCROM

1 はじめに

本日は最近の IUCN や ICCROM の経験をみなさまと共有させて頂きたいと思います。そして、この非常にタイムリーなテーマを取り上げてくださっていることにお礼申し上げたいと思います。

自然と文化のつながりあるいは相互依存というのは、立場の異なる人にとって、違った意味を持つことがあります。私たちにとっては、もちろん、世界遺産の仕事と関係があります。現在では、世界遺産コミュニティにとってのみならず、多くの人にとっても関心のあることだと思います。

まず、ある文章の引用から始めたいと思います。「生物多様性と文化はどのように交差するのか？」という論文で、J. Pretty ほか 16 名の著名人が 2008 年に書いたものです¹。

世界の生命の多様性には、生命即ち生物多様性、そして、生命の意味に関する世界観・宇宙観、即ち文化的多様性が含まれるという共通の認識が世界中で形成されつつある。この「多様性」の重要性は、世界にますます認識され、多様性に関する知識も高まっている。工業化した社会の中で、多くの人が疲弊し、都市の人は伝統的な自然とのつながりを失っている。よく言われる自然と文化の乖離は普遍的なものではない。自然を支配し、管理したいという要求は、近代の工業化した思想の産物なのである。

一方で、そのような乖離がそれほど明らかではない世界をご紹介します。これは、自然と文化が分かれていない 2000 年前のアタルヴァ・ヴェーダの文章です。

母なる大地よ、聖なる丘よ、雪の山、そして深い森、私たちに優しくしてくれ、私たちに幸せを授けてくれ、肥沃になれ、そして全てを育ててくれ。全ての人種や全ての人の行動を支え続けてくれ。大地の怒り（自然災害）から私たちを守ってくれ。そして、あなたの子どもたちを搾取して服従させないでくれ。

2 自然と文化のつながり

宗教

世界の多くの社会は、まだ、自然と文化のつながりを様々なかたちで維持しています。この写真はタイの仏教僧侶が森を崇めている写真です。人類に与えられる感謝をあらわす毎年の行事です。仏教も他の宗教も人間と自然との関係を強調しています。社会における自然と文化の結びつきに対する認識や経緯、継続性を説明するには何時間もかかりますが、今日はそれが目的ではありません。

推測によると、世界で 10 億人以上の人が山は神聖だと信じているということです。神聖というのは崇拜や畏敬を呼び起こすより、さらに深い表現であるとされています。これが人間の生活に意味と活気を与えるものです。自然の場所は神聖視されていますが、これは人々の精神的なニーズを充足するだけではなく、生活に重要な自然の価値や資源を守る基本的な要因としても作用しています。

スリランカの中央深部の高地には二番目に高い世界遺産の山は、仏教、ヒンズー教、キリスト教、イスラム教にとっての神聖な山があります。スリランカの重要な川はすべてここを水源にしています。そして、この山はまもられ、この国の何百万人という人の水資源も同時に保護されてきました。

世界遺産の文化と自然

現実には、世界は分断されています。しかし、私たちは世界遺産コミュニティです。私たちはみな、世界遺産条約はオリジナルであるということに誇りを持っています。世界遺産条約は自然と文化の保護を一つにリンクさせています。そして、自然と文化は相反するものであるという一部の考えに異議を唱えています。自然と文化は相互補完的で、お互いに分けることはできません。異なる人々の文化的なアイデンティティはその人たちが暮らしている環境によって形成されています。人類の創作物は、しばしば美しい自然環境にインスピレーションを受けています。また、最も素晴らしい自然の遺跡は何世紀にもわたる人間の活動の痕跡です。

しかし、現実には世界遺産条約には、第一条の文化遺産の定義の中で「人工と自然の結合の所産」という言葉が一ヶ所使われているだけです。

この詩は、1903年、野口米次郎（ヨネ・ノグチ）が書いた英文の詩”SPIRITS OF FUJI MOUNTAIN”からの引用です。富士山の美しさについて書いています。「白き奇跡、他に類のない景色、荘厳、美」と彼は描いています。「美」も、世界遺産の文脈の中で私たちは認識しなければなりません。

世界遺産には、複合遺産もあります。タスマニアも複合遺産ですが、自然と文化は別々に評価されており、別々の管理計画となっています。中国の峨眉山と樂山大仏も複合遺産ですが、自然と文化は別々に評価されています。

私たちは文化的景観という革新的なアイディアを通して自然と文化の結合を捉えることができたと思います。文化的景観は、場所と人を結合させる機会を提供するものです。すなわち、自然的な要素と文化的な要素がありますが、まだ多くの問題があります。2005年 IUCN を訪問した時に、文化的景観のことはまだ話題にすらありませんでした。今は状況が全く変わりました。

文化と自然遺産のセクターそれぞれの保存管理に対してそれぞれのアプローチがありますし、それぞれの独自の方法は続きます。自然と文化では別々の2つの管理マニュアルがあります。

自然の価値を持った文化遺産もたくさんありますし、文化的な価値を持っている自然遺産も沢山ありますが、その相互のつながりも十分に認識されていませんし、一緒に管理もされていません。したがって、対応すべき問題は沢山あります。世界遺産には、文化的価値と自然的価値がありますが、互いの関係は、しばしば見過ごされています。一方で、現代の管理制度はこれらの課題に対応する手段を十分に持っていません。したがって、遺産の専門家にとっては多くの問題となっています。

先週、ICCROM の会議がありましたが、自然と文化をつなげるワークショップに関して質問がなされました。まだ、文化に自然が加わることを躊躇する人がたくさんいるのです。それぞれの国で全く違う制度があるからです。

そこで、私たちは何ができるのでしょうか。何かしなければなりません。しかし、どこから始めればいいのでしょうか。

その結びつきを理解する様々な試みや、自然遺産と文化遺産の間で知識や経験を共有する試みもあります。私たちが始めたというわけではありませんが、これらの結びつきを理解するための様々な研究がすでになされています。

生物多様性の文化的価値

国連が主導したミレニアム生態系評価の試みを通して人間の文化は生態系の強い影響を受けている、そして生態系の変化は文化のアイデンティティや社会の安定性に重要なインパクトを与えるということがすでに言われています。ここでは、生物多様性と文化の結びつきは、生態系サービスと人間の福祉・幸福との関係として評価されています。

また、生物文化多様性という言葉も自然と文化をつなげることに関心を持っている人たちの間で一般的になってきています。今日も話題になるかもしれません。これは、人類と自然、文化の多元性、そして生態学的な完全性を織り交ぜたものと説明されています。

知識と経験の共有については、すでに私たちは様々な活動を始めています。

例えば、私が作成した世界文化遺産管理のマニュアルでは、IUCN が開発したツールキット (Enhancing our Heritage Toolkit) を 20 回以上参照しています。

また、世界遺産コミュニティでは、自然と文化の結びつきに関する具体的な事例もあります。例えば、「信仰の山」専門家会議がその一つの例です。2001 年に和歌山で開催された会議で、稲葉先生も私も参加する機会がありましたが、そこで信仰の山の定義を「精神と物質が一体となる重要な意味を持つ自然の高み」と定義づけました。そこで思い出すのは、「自然と文化の結婚を目指す」という提案をさせて頂いたことです。その狙いは 2 つを分けないで保全を語ることでできる新しい子どもを産ませようという趣旨でした。そこにはポジティブな取り組みがあることを理解しつつ、諮問機関としてこの自然と文化の相互連環についてより多くのかたちで展開していかなければならないという認識をしたところです。

3 文化と自然をつなぐ人材育成プログラム

世界遺産人材育成プログラム

その中で一つの提案がされました。それは「文化と自然との相互連環を世界遺産の枠組みの中で強化するためのトレーニングプログラム」で、世界遺産人材育成プログラムと呼ばれ、世界遺産委員会で承認されました。今日、すでに完成されたトレーニングコースのカリキュラムが出来上がっています。これがどのようにして形成されたかということについてお話をします。

このカリキュラムの制作にあたっては 3 つの活動が軸となりました。

一つは包括な状況分析をポジションペーパーとして完成をさせることで、もうすでに、みなさまにお手元に出すことができるかたちになっています。二つ目に、スイスのグランにある IUCN 本部で 2 日間の会議を開き、ここで、IUCN、ICOMOS、ICCROM、世界遺産センター、そして様々な専門家の協力を得て、カリキュラム草案をつくりました。三つ目はパイロットミニコースで、現在、建造物遺産保存プログラムというかたちでのモジュールとなっています。

始めにコンサルタントを採用してポジションペーパーの作成を行い、様々なアプローチ、考え方について意見交換を行いました。既存のプログラム、そして将来どのようなオプションがあるのかということについてこのペーパーの中で論じられています。文化、自然との関連をどのように再考していかなければならないのか、そして文化と自然は異なるものですが、それがどのようにして相互関連しているのか、枠組み、社会的な想定、そして力関係をどのように考えていかなければならないのか、さらにはどのようなかたちでの批評を行っていかなければならないのかというものでした。

このペーパーに基づいてグランで専門家会議が開かれ、これは歴史的な会議となりました。参加者は様々な議論を経た後、カリキュラム草案について合意しました。この草案については、パイロットミニ構想を行ったあと、修正をすることになりました。この会議には IUCN のジュリアン・マートン・ルフェーブル事務局長も参加し、トレーニングコースのコンセプトに賛意を表してくれました。さらには専門家の方々との意見交換にも臨みました。

ミニパイロットコース

このカリキュラム草案に基づいてミニパイロットコースが組織をされました。ICCROM の建造物保存コースの一環として、2014 年 4 月に行われたものです。19 カ国から 19 人が参加し、また、自然遺産分野からも 6 人が参加しました。国籍は中国、ヨルダン、メキシコ、リトアニア、ロシアです。さらには、全ての関係機関、分野からの専門家の参加も仰いだところです。

ICCROM の他の活動と同様に、このコースモジュールについては講演、現場視察のほかに、グループ活動やコミュニティとの会談を通してより知識を深め、得られた知識の検証を行いました。

ミニパイロットコースは、(1) 自然と文化の相互関係の理解、(2) 自然と文化の価値と相互関係の評価、(3) 自然と文化の相互関係を世界遺産の中で活かす、(4) 具体的に何を

どう変革すればよいか？ の4ユニットからなっています。7日間を使って、4つのユニットを実施しました。

サイトとして採用されたのはヴェスヴィオ火山です。火山でありながら文化的な側面を持っているものであり、その意味において理想的なサイトです。また同時にポンペイとヘルクラネウムという世界遺産が別々に管理されている場所です。その意味において、文化と自然について話しをする上で最良の場所だと言えます。

参加者は、グループに別れて新しい文書の作成を行いました。その中に保護管理の土台となる全ての価値を包含しました。様々なコミュニティと話し合い、関係者とも話し合うことによって管理上の問題を確認し、提案を通じて自然と文化の相互関係をもとにより良い管理を目指しました。このモジュールを通じて、自然と文化の専門家や、政治家の協力をどのように強化したらよいかを確認したわけです。自然と文化の遺産についての相互関係を理解できただけではなく、災害管理の側面にも目を向けることができました。

カリキュラムの概要

現在、パイロットコースの成果に基づいてカリキュラムの完成を目指しているところです。その中には対象者、期間、目標、内容、読書文献を含めたコースユニット、概要、授業法、リソースなどが含まれています。

参加者は遺産関係の専門家ですが、その中にはサイトマネージャー、政府関係者、NGO、コミュニティを含みます。また、自然遺産と文化遺産の両方の専門家を含んでいます。自然遺産、文化遺産の専門家が混在することで、これまでの仕事のやり方の問い直し、促すためです。

このコースの全体的な目標は、コースを修了し、参加者が知識を獲得できるようにすること、スキルや認知力を高めることによって自然と文化の関連を理解しマネジメントの改善を行うことです。それぞれの学び合いを通じて目標を達成します。最も重要なのは、どのように仕事をするかについて追加となる知識の提供を行うことですが、同時に、具体的な管理手法を学ぶ合うことも重要です。

さらに、自然と文化を結びつける教材を作成し、その他の対象者に対しても目を向けていきます。

期間についてはまだ議論をしているところです。活動には、いろいろな要素がありますが、2週間から4週間くらいが適切ではないかと考えています。次の4つのコアモジュールが開発されています。

ひとつめは、自然と文化を分ける考え方を問い直すモジュールで、これは必須です。自然と文化の関連性についてのトレーニングの基本は、様々な価値や慣習、相互に関連し依存し合う多くの課題について理解を深めるためのものです。重要なのは、考え直す機会を提供することです。

二番目は様々な人々との意見交換を幅広い参加を通じて行うことです。シナジーを構築し、参加者に対して付加価値を提供することが重要だと認識しています。

三番目はお互いに学び合う必要性を認識し、管理政策の改善を探究することで、これは、独立したモジュールとなっております。

四番目は現場での学びで、これはフィールド活動に近いものです。トレーニングコースの最後に提供されるものとなっています。

これらのモジュールについては、全て学習目標、概要説明、コアユニット、教授法、そして読書文献などが備えられています。参考資料もありますので、これを活用することによってすぐにコースを始めることができます。期間については様々な要素に基づいて柔軟に対応できるようにしています。

¹ Pretty, J et al. (2008) How do biodiversity and culture intersect? (http://www.researchgate.net/profile/Jules_Pretty/publication/268059893_How_Do_Biodiversity_and_Culture_Intersect/links/546def460cf2d5ae3670a3c9.pdf)